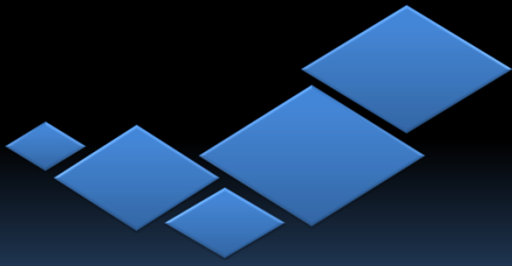




Title	月刊DRF 第15号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2011-04-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/73500">http://hdl.handle.net/2115/73500</a>
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; <a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの
File Information	DRFmonthly_15.pdf



[Instructions for use](#)



# 月刊 DRF

## Digital Repository Federation Monthly

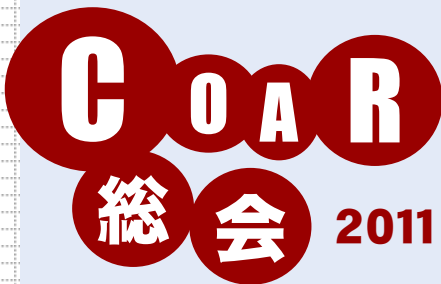
第15号

No. 15 April, 2011

【速報】COAR総会 2011

【特集】平成22年度 DRF活動報告

この度の東北地方太平洋沖地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。多くの図書館でこれから復旧活動をされるにあたり、DRFは可能な限りお手伝いしたい所存です。何かできることがありましたら、いつでも遠慮無くお申し出下さい。【DRF事務局】



3月28-29日にかけて、ハンガリーのデブレツェン大学でCOAR (Confederation of Access Repositories) の2回目の総会が開かれました。DRFからは、小樽商科大学の杉田さんと大阪大学の土出さんが参加しました。終了したばかりのCOAR総会の様子を現地からレポートしてもらいます。

3月28日

COAR総会初日は、午後からワーキンググループの会合がありました。

### WG1 : Repository Contents

「いかにコンテンツを増やすか」をテーマに、各国の実践経験の共有と、出版社のOA対応の促進について議論しました。

経験の共有では、日本の事例として昨年2月に作成した英文パンフ「Institutional OA Advocacy in Japan」を配付しました。また、情報共有ツールとしての「月刊DRF」を紹介し、これをヒントに、各国でかわるがわる編集を行うニュースレターを刊行してはどうかなどのアイデアが交わされました。

出版社のOA対応は、セルフアーカイビングに対するポリシー表現の標準化、PMCなどの出版社による直接デポジットの拡大、Springer社の包括OA契約のような試みの促進などに今後取り組んでいくべきであるとの議論がありました。

### WG3 : Repository and Repository Networks Support & Training

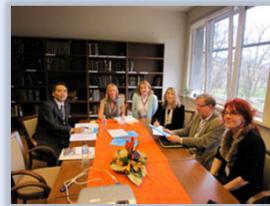
「リポジトリ担当者の育成」をテーマに、著作権や教員へのアプローチといった世界共通の問題について議論しました。技術、組織、著作権の問題解決、マネジメント（機関の方針など）、アドボカシーの5つのテーマ

## 海外機関と連携して リポジトリをすすめてよう

をもとに各国・各地域の優良事例と研修教材の収集を行うことになり、日本では学術ポータル担当者研修などの体系だった研修や教材がすでに存在することを紹介しました。

あわせて国際ヘルプデスクも設置され、各国に窓口が作られることとなりました。

もう1つのWGであるWG2 : Interoperabilityでは、DRIVERガイドラインをよりグローバルな合意のもとに、COARガイドラインに発展させることが最大の目標となるようです。



WG1の様子。杉田さんの隣が主査のキャスリン・シーラーさん



初日のWG会合が開催されたデブレツェン大学図書館

3月29日

2日目は、デブレツェン大学のゾルト・パレス副学長の「科学研究の成功のためにはストロングな図書館とオープンアクセスが絶対必要である」との挨拶で始まりました。

ロツソー博士が日本の状況について触れ、東北大学の加藤課長（DRF国際連携ワーキンググループ）からのメッセージが杉田副議長によって代読され、会場で日本のために1分間の黙祷が行われました。

総会では、COARの財政報告、昨年の活動と今後のプランについての報告と議論がありました。初日に議論した3つのワーキンググループのテーマについてさらに検討され、来年に向けた活動計画が策定されました。

来年の総会ではCOARガイドラインが成立する予定です。我が国のメタデータスキーマの特長を反映していけるように、国際コミュニケーションをますます密にしていける必要があると感じました。



総会で東北大学加藤課長のメッセージを代読する杉田さん



日本での取り組みについて紹介するロツソー議長

## 企画ワーキンググループ

## 『月刊DRF』創刊

- ・ 広報誌の月刊DRFを平成22年2月に創刊し、以来、月1回のペースで発行を続けている。DRF主催のワークショップや関連イベントの報告、海外のオープンアクセス動向や国際会議の報告など多彩な内容を伝えることで、リポジトリコミュニティにおける新しい情報共有のツールとして成長しつつある。

## ワークショップ・研修会の開催

- ・ 各地でワークショップを開催し、研修、および地域コミュニティ形成支援を計11回行った。
- ・ 前年度に引き続き国立情報学研究所の学術ポータル担当者研修の企画・講師を務めた。
- ・ 全国ワークショップを1回開催した。



## ウェブサイトのリニューアル

- ・ より使いやすくすることを目的に、既存コンテンツのグループ化、新規コンテンツの追加、デザインの変更などを行った。

Kikaku

## 技術サポートワーキンググループ

## 技術ワークショップの開催

- ・ DRFtech-Karuizawa を開催し、junii2チェックツール、セルフアーカイブ用ウェブフォーム、IRサーバ負荷状況監視ツールなどの機関リポジトリに有用なソフトウェアやツールを開発した。
- ・ 4回の技術ワークショップ（香川・浜松・旭川・熊本）を開催し、機関リポジトリの実務で必要とされる技術的な事項についての講義や実習を行った。



## ユーザ支援

- ・ 機関リポジトリ体験サイトUsrComの掲示板に寄せられた技術上の質問に対して回答した。
- ・ DRFのメーリングリストに寄せられた技術的な質問に対して回答した。

Gijutsu

## 国際連携ワーキンググループ

## COARでの活動

- ・ 昨年度に引き続いてCOARに加盟した。COARの副議長を杉田茂樹（小樽商科大学）が担い、アドバイザーの土屋俊（千葉大学）、徳田聖子（筑波大学）、土出郁子（大阪大学）がワーキンググループのメンバーとなった。
- ・ リソースガイドの中から有益な論文をピックアップし、翻訳公開した。
- ・ ハンガリーで開催された総会に杉田茂樹、土出郁子の2名が参加した。（1面のCOAR総会の記事参照）

## 国際会議での発表・情報交換

- ・ Berlin8（10月25-27日）で、徳田聖子が「Sliming in: The Lack of Policy and the Leadership of Repository Managers」と題して発表を行った。
- ・ SPARC Digital Repositories Meeting 2010（11月8-9日）に土出郁子が参加し、SPARCのメンバー等と情報交換を行った。また、アメリカ議会図書館を訪問し、保存メタデータ等について情報交換を行った。

## 英文パンフレットの作成と配布

- ・ 国内のオープンアクセス活動を紹介した英文パンフレット「hita-hita: Institutional OA Advocacy in Japan」を作成し、世界の769機関に送付した。「ひたひた」をキーワードとし、DRFの活動や、各機関の広報活動、コンテンツ収集活動などを紹介した。海外の関連メーリングリストやニュースサイトで紹介され、COARからの追加発送依頼や米国SPARC議長からパンフレットの内容を絶賛するメールが送られる等、大きな反響と高い評価を得た。



## 海外トピックの紹介とOA weekの展開

- ・ 海外のメーリングリストの話題、翻訳文献の内容紹介等をDRFメーリングリストに紹介した。
- ・ SPARC等が主催するオープンアクセス週間（10月18-24日）には、日本窓口を土出郁子が担当し、期間中の国内のオープンアクセス活動を先導するとともに、専用ウェブサイトを作成し、情報発信を行った。

オープンアクセスウィーク  
2010.10.18-24

Kokusai

## コンテンツ

## 学術雑誌論文公開促進のふたつのアプローチ

小樽商科大学・帯広畜産大学・北海道大学

## 組織的な意識喚起活動

- 北海道大学で「いいとも作戦」（数珠つなぎ式に研究者から研究者を紹介してもらい、連続的に研究室訪問を行うもの）を行った。
- 小樽商科大学で専属司書制（図書館職員と研究者をマンツーマンで割り当て、IRへの論文登録をはじめとして、図書館サービス全体のリエゾン機能を担うもの）などの活動を行った。
- 聖学院大学、金沢大学で研究室訪問や教員インタビューを実施した。

## 義務化方針を含む制度構築

- Stevan Harnadの「Best Draft Model for US University Green OA Self-Archiving Mandate So Far: U North Texas」を翻訳し、国内で紹介した。
- 小樽商科大学では、科研費申請の学内説明会で成果論文のIR公開を提案し、同大学の科研費申請の27%で、計画調書欄にIRでの公開が謳われた。
- 北海道大学でも同様の働きかけを各研究科の教員向け説明会、医学部保健学科のFD研修における説明会等で行った。

Rliaison

## 著作権

OAとセルフアーカイビングに関する  
著作権マネジメント

筑波大学・千葉大学・東京工業大学・神戸大学

## 学協会関係者への説明会等の開催

- SPARC Japanセミナーで発表を行い、協力依頼をしたパートナー学会と意見交換を行った。
- SPARC Japanパートナー誌を刊行するSTM系3学会へOA方針等に関するインタビューを行った。
- 国立大学図書館協会学術情報委員会と連携し、国内2,462学協会にSCPJ調査協力依頼及び機関リポジトリ広報資料を郵送した。

## SCPJデータベースのデータ更新及び機能拡充

- SCPJデータベースに登録済の学会のWebサイトの悉皆調査を行った。
- 国内の主要な電子ジャーナルプラットフォームを利用している学協会への調査を実施し、最新のデータをSCPJデータベースに反映した。
- 各々の学会データに研究分野を付与した。
- これにより、2010年2月末時点と比較して、登録学会数が14%増加したにもかかわらず、Gray学会は68.8%から67.3%へ減少した。
- 複数編集アカウントの制御、編集履歴管理、Webフォームでのポリシー連絡といった機能追加や、編集・入力画面及び統計表示の改善、英語版ページの作成などを行った。

SCPJ

## 識別子

OA環境下における同定機能導入のための  
恒久識別子実証実験

金沢大学・北海道大学・千葉大学

## DSpace1.6の評価

- 著者典拠データをメタデータとして保有する機能を標準で持つDSpace1.6を評価するため、金沢大学学術情報リポジトリKURAをDSpace1.6にバージョンアップした。
- 研究者識別子として使う科研費番号を登録済みのメタデータに追加入力した。
- JAIROから研究者識別子がcrosswalkの変更なしでハーベストできること、ReaD、研究者リゾルバなどのIR外部の研究者データベースを検索してIDを選択できることを確認した。

## ワークショップの開催

- 研究者識別子に関する情報共有を推進するため、平成23年2月17日にワークショップ「名寄せのこれから」を開催した。（参加者27名）
- 本ワークショップの開催により、国内での研究者識別子プロジェクトの情報共有と今後の方向性の確認を行った。

## プロジェクトサイトの翻訳

- プロジェクトの解説サイトを翻訳し、英語による情報発信を行った。

Mailidentity

## 評価

## 機関リポジリアウトプット評価の標準化と高度化

千葉大学・東北大学・筑波大学

## 統計処理の妥当性の検証

- Cookieを用いることで、現在のIPアドレスをもとにした統計処理より精緻な処理ができるかについて検証した。
- ROAT が準拠しているCOUNTER の基準の妥当性について検討した。

## カウント方法標準化に関する国際連携の推進

- Meeting for Standardization of Usage Statistics of IR と International Seminar on Standardization of IR Usage Statistics を実施し、上記の結果を公表した。
- 平成21年度から連携を進めているドイツとフランスの研究グループとの連携事項を確認した。
- PIRUS2プロジェクト(イギリス)と連携し、機関リポジトリと電子ジャーナルのアクセス(COUNTER 準拠)の統合等を行うことについて検討した。

## 多様な分析が可能なレコード処理機能の開発

- ROAT を用いた統計処理を国際展開するための、より望ましい仕様について検討した。

ROAT

# 新任担当者のための 機関リポジリ用語集

これを見れば機関リポジリなんて怖くない。  
みんなでめざせ オープンアクセス!!

## OA : オープンアクセス

学術情報（主に、査読済みの学術論文）をインターネットを通して、誰でも見ることができるようにすること。セルフアーカイブやOA雑誌で実現可能。「OAにすることで、論文のインパクト向上が期待できます。」というのがIR担当者の決めゼリフ

## 教員インタビュー

IR担当者の特徴的な仕事の1つ。教員に研究内容や機関リポジリのメリットなどを聞きに行くこと。登録件数の1000件目などのキリ番を獲得した教員にインタビューすることが多い。

## DSpace : でいーすぺーす

日本で機関リポジリを立ち上げている多くの機関が採用しているリポジリソフトウェア。

## Green Journal : ぐりーんじゃーなる

著者によるセルフアーカイブを認めている雑誌のこと。ただし、IRに登録できるとは限らないので注意が必要。

## IR : 機関リポジリ

オープンアクセスを推進する1つの手段。機関が中心となって論文などの学術成果の公開を行うサービス

## SCPJ : えすしーぴーじえい

日本の学協会の機関リポジリへの論文掲載許諾状況を調べることのできるデータベース。IR担当者は誰もが使っている。

## Mandate : まんでーと

機関リポジリに論文を登録することを義務化すること。海外では事例があるが、日本では部分的。あなたの機関が、Mandate実施機関となったあかつきには、ぜひDRFまでご一報下さい。

## ハンドルシステム

リンク切れをしないために、リポジリの登録コンテンツなどのインターネット上の資源に一意のURIを付与できるシステム。使うにはCNRIへ登録が必要（有料）

## DRF : だーふ

デジタルリポジリ連合の略称。メーリングリストや集合イベントなどの活動を行っている。DRFのメーリングリストに書き込みたくなったら一人前の担当者かも？

## メタデータ

簡単に言うと書誌データ。論文、教材、図書などどのようなデータも思いのままに記述できるが、規則や基準はゆるいため、どのように表現したらいいか迷うこともしばしば。

## SHERPA/RoMEO : しえるぼろめお

海外の学術雑誌の許諾状況を確認できるデータベース。SCPJの兄貴分的な存在。

## Self Archive : せるふあーかいぶ

著者が自分の論文を機関リポジリや分野別リポジリ、自分のウェブサイトなどにアップロードして公開すること。

## 合意形成

学内(機関内)で機関リポジリを始める時に、研究者や上層部の合意や承認を得るためのプロセス、または手段。IRを立ち上げているところはどこも経験済み。

## JAIRO : じゃいろ

NIIが提供する機関リポジリの統合検索サービス。申請すれば、CiNiiとの連携も可能。

## ハーベスト

自分の機関リポジリのメタデータを自動的に取ってくれること。使用例：「OAister、JAIROからハーベストされるよう申請をお忘れなく」

## 著者最終稿

著者が持っている査読雑誌にアクセプトされた段階の原稿ファイル。海外の出版社の多くはこのファイルをリポジリに登録することを許可している。

## 出版社版

出版社が発行した誌面そのもののこと。電子ジャーナルファイルや抜刷をスキャンして取り込んだPDFファイルは出版社版になる。

## 著作権譲渡契約書

著者が論文を雑誌へ投稿する際に出版社や学会などと交わす契約書。その中に、著作権の譲渡や著者に残されている権利（セルフアーカイブなど）が記載されている。

まだDRFに参加されていない機関の方、一緒にDRFの活動をしてみませんか？  
DRFでは随時、参加機関を募集しています。詳細は、ウェブサイトの「DRFについて」をご覧ください。

新規参加  
募集

次号  
予告

【特集】図書館コンソーシアムJUSTICEのすべて 4月1日に誕生するコンソーシアムJUSTICEを紹介します。  
【あの人に聞きたい】 JUSTICE誕生の立役者、尾城孝一氏に話をうかがいます。

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第15号 平成23年4月1日発行 デジタルリポジリ連合